

A. メコン川で捕れるなまぎの一種パンガシスは人々の貴重なタンパク源
 B. 寺院のそばでお供え用の花を売る女性（ラオス）
 C. 日本でも有名なタイのトムヤムクン ©Tim Hill/Alamy/PPS
 D. ミャンマーの女性 ©J Marshall/Alamy/PPS
 E. プンベンの中央市場には新鮮な魚や野菜が並ぶ
 F. メコン川の夕暮れ（タイ） ©Superstock/PPS
 G. メコンの人々も食事ではしを使う ©Grant Rooney/Alamy/PPS
 H. 浴衣を着たベトナムの女の子。ホイアン祭りでは日本との交流イベントが開かれた
 I. カンボジアの世界遺産アンコール遺跡



雄大なメコン川流域に位置する
 カンボジア、タイ、ベトナム、ミャンマー、ラオス。
 このメコン地域は、まだまだ私たちが知らない魅力であふれている。

悠久の歴史を今日に伝える数々の遺産に出会えるのも、メコン地域の魅力。中でも有名なのは、カンボジアのアンコール遺跡、タイの古都アユタヤ、ラオスの古都ルアンパバーン、ベトナムの古都ホイアンなどに代表される世界遺産だ。世界三大仏教遺跡の一つ、ミャンマーのバガンも美しい。日本から飛行機でわずか約6時間のタイには、年間100万人以上の日本人が訪れている。

食もまた、この地域の魅力の一つだ。タイのトムヤムクン、ラオスのラープ（ひき肉の香草いため）、カンボジアのクイティウ（コメ麺のスープ）、ベトナムのフォー、ミャンマーのモヒンガー（麺料理）などが各国を代表する料理で、日本人の口にもよく合うものが多い。

メコン地域と日本には共通点も。主食がコメであり、はしを使って食事をする。また、同じ仏教国として、交流の歴史も長い。特に近年は、政治対話、経済・文化、観光など幅広い分野でヒトとモノの行き来が活発だ。そして「日メコン交流年」である今年2009年は、各地でメコン地域と日本の交流をこれまで以上に深めるための取り組みが行われている。

悠久の歴史を今日に伝える数々の遺産に出会えるのも、メコン地域の魅力。中でも有名なのは、カンボジアのアンコール遺跡、タイの古都アユタヤ、ラオスの古都ルアンパバーン、ベトナムの古都ホイアンなどに代表される世界遺産だ。世界三大仏教遺跡の一つ、ミャンマーのバガンも美しい。日本から飛行機でわずか約6時間のタイには、年間100万人以上の日本人が訪れている。

秘められた可能性



特集
 希望と発展の地—メコン

魅力あふれるメコン

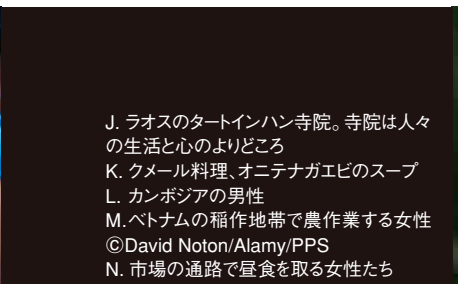
命の恵みをもたらすメコン

中国雲南省から、ミャンマー、ラオス、タイ、カンボジア、ベトナムに伸びるメコン川。全長4800キロにも及ぶ母なる大河は、いつの時代もここを訪れる者を魅了し、この地に生きる人々にたくさんの「命の恵み」をもたらしてきた。

メコンの名の由来は諸説ある。一説によると、「メー」はタイ語やカンボジア語で「母」を、「コン」は「水」を意味し、日本語にすると「母なる川」。正しい発音は「メーコン」という。

メコン川流域にあり、総面積が約200万平方キロという広大な大地が広がるメコン地域には、約2億2000万人に上る多様な民族が共生する。そうした人々がメコン川から受けてきた恩恵は計り知れない。川は、豊かな自然をほぐくむだけでなく、産業を生み、エネルギーを作り出す源。また、この川に生息する魚は貴重なタンパク源であるとともに、下流に広がる肥沃な大地では、主食となるコメの生産が盛んに行われている。

そして、川に対する人々の敬意の表れなのだろう。どの国でも、川からの恵みを無駄なく活用する昔ながらの知恵が息づく。例えば、メコン地域の食堂や屋台に必ずといっていいほど置いてある魚醤。魚やイカなどの魚介類を発酵させた調味料で、主食のコメにも合い、地元の料理には欠かせない。



J. ラオスのタートインハン寺院。寺院は人々の生活と心のよりどころ
 K. クメール料理、オニテナガエビのスープ
 L. カンボジアの男性
 M. ベトナムの稲作地帯で農作業する女性 ©David Noton/Alamy/PPS
 N. 市場の通路で昼食を取る女性たち
 O. ラオスの女の子 ©Paul Strawson/Alamy/PPS
 P. 世界遺産の町、ベトナムのホイアンに並ぶランタン
 Q. 世界三大仏教遺跡の一つ、ミャンマーのバガン ©R.Matina/AGE/PPS

撮影：久野真一 (B.H.J.P)
 今村健志朗 (A.E.I.K.L.N)